

かわら版

人生二毛作

公益財団法人
長野県長寿社会開発センター



〒380-0928
長野市若里七丁目1番7号
長野県社会福祉総合センター5F
TEL 026-226-3741
FAX 026-226-8327
info@nicesenior.or.jp
http://www.nicesenior.or.jp

なくあくまで農村の日常です。宿泊先で用意していただいた弁当を持参して、グループに分かれて受入先の家庭へ訪問します。体験する内容は受入家庭ごとに異なりますから、畑あり、ヤギの飼育あり、林業ありと様々です。その活動で一番大切にしていることが「あいさつ」。農村の日常を通じて人とのふれあいや自然や命の大切さを学びます。農村に暮らす高齢者にとっても、子どもたちと過ごす時間は、培ってきた経験や技術を生かせる大切な場となっています。

花桃の里・夏

上田市



まだまだ強い日差しの毎日ですが、吹く風に心地よさを感じる季節になりました。今月も県内各地のレポートをお届けします。

日帰り農村体験“ほっとステイたてしな”

立科町



木漏れ日が緑を輝かせる木立の中に分け入ると、奥から子どもたちの楽しそうな声が聞こえます。自分で間伐したヒノキを輪切りにしたり、竹を節のところで切って“カエル”を作っている最中でした。日帰り農村体験“ほっとステイたてしな”は、都会などの子どもたちが農村の日常体験を通じて生きる力を育むことを目標としています。体験するのはありのままの農村。だから手植えの田植え作業はしないとのこと。なぜなら、昨今の田植えは機械であるのが当たり前。ここで体験するのは農業では

しなの鉄道大屋駅付近で千曲川に合流する依田（よだ）川は、上田市の旧丸子町を流れる清流です。その流れをさかのぼり旧武石村から奥深く谷間へ分け入る支流が余里（より）川です。この余里川に沿う山間の集落は、4月から5月にかけて数万人の観光客が訪れる花桃の名所です。その花桃の手入れをしているのが“花咲じいさんくらぶ”の地元の方々です。

今はシーズンを過ぎて7月。「世界中でいちばんきれいな2週間」と地元の方々が自負する赤、桃色、白と彩り豊かな季節は過ぎて、夏の余里は一面緑色の山里です。“花咲じいさんくらぶ”の活動についてお話を伺うため、シーズン中は農産物を販売する廃線となったバス停留所で待ち合わせると、代表の北沢さんが軽トラックでいらっしやいました。すると、挨拶もそこそこに停留所から縁側台とパイプ椅子を引っ張りだし掃除を始められました。何が始まるのか？と思うと「よしっ！」と言って、軽トラックからポットを取り出し、「野点（のだて）だな！」。

手際よく並べたカップにドリッパーからコーヒーを淹れごちそうしていただきました。「このくらい余裕がなくちゃいけないだよ」。

濃い緑色に埋もれるほどの里山は風の音しか耳に入りません。「この風景がいいんだよ」と停留所の椅子に腰かけコーヒーを頂きながら、花桃のことや暮らしの様子を伺った。もともと花桃は人寄せのためではなく自分の集落をきれいにするために、地元の家にあった花桃の木を株



シーズン中は売店になる旧バス停

分けして徐々に広まったこと。落ちた種から育てた苗を販売して活動の資金にしていること。集落は60世帯ほどだが高齢者が多く、買い物

に出かけられない方は近隣の農協まで連れて行ってもらうこと。高校生は遠くはなれた上田市内の高校まで親が送り迎えしていること。山際に張り巡らされた柵は鹿被害を防ぐため。「魚はいますか？」と尋ねると、田んぼの用水のよどみを指差した。夏の太陽がきらめく水面の下には鯉かと思間違ふほど丸々と太ったイワナがゆらゆらと泳いでいました。

一番の見ごろを迎える時期がちょうど5月のゴールデンウィークに重なるのは花桃とこの山里の地理的条件の偶然の一致なのかもしれません。「神様の贈り物なんだよ」という北沢さんの言葉が印象的でした。お礼をして、しばらく村の様子を写真に収めていると、北沢さんの軽トラックがクラクションを鳴らして通り過ぎてきました。花桃の里の夏はとても静かでした。

シニア大生善光寺ボランティアガイドで活躍 シニア大学プログラム

善光寺門前のガイドボランティアとして活動を始めた現役シニア大生とシニア大OBのお二人にサポートガイドとして同行していただきました。シニア大学1年生の授業の一環で、この日は善光寺と門前の基礎知識を学びました。午前の講義のあと午後は善光寺と門前の

現地学習です。この日のガイドは長野郷土史研究会会長の小林一郎さん、副会長の小林玲子さんです。そしてシニア大学2年生の原さんとOBの松林さんが新米ガイド役として二班に分かれ同行しました。お二人は昨年NAGANO検定合格後、長野市ガイド協会のボランティアガイドとして登録。現在ボランティアガイドの修行中です。



ボランティアガイドのお一人、シニア大2年生の原さんは、生まれ育った長野のまちを少しでも元気にしたい、多くの方に良さを知ってほしいとボランティアガイドの活動を始めたそうです。シニア大生からは歩きながら次々と質問され、地元ならではのお得情報も交えながらガイド活動を楽しんでいる様子でした。

現役シニア大生はボランティア活動を企画し、活動を始めるところですが、人生二毛作の身近なモデルとして先輩方のボランティア活動に接するいい機会になったのではないのでしょうか。

